

バレーボール学会・2001年度第2回研究集会

「これからのバレーボールを考える - その2 (現場からの提言)」

平成13年10月21日(日)、2001年度第2回研究集会が、香川大学研究交流棟にて開催された。全日本ジュニア男子監督の池田長廣氏、前仲南町立仲南中学校教諭の亀山正昭氏、牟礼町立牟礼中学校教諭の長曾絹代氏をシンポジストに迎え、それぞれの立場から、現場の取り組みと課題に関して熱心な議論が展開された。

「ジュニア期の選手をどう伸ばしていくか？」

全日本ジュニア男子監督 池田長廣氏

全日本チームは、ここ何回か、オリンピックにでられない状況ですが、ジュニアにおいても、ここ8年間、アジアの壁を突破できないという状況が続いていました。ジュニア男子監督の前に、ユース監督をつとめました。銀メダル、銅メダルという成績でした。選手に恵まれたということですが、少なくとも高校生のレベルにおいては、世界で通用しています。

今までの全日本のチームは、その時点での、いい選手を集めてきてチームを作るというシステムでした。

小学校、中学校、高校、大学、ジュニア、シニアの指導者が一貫性のある指導をしていかなければダメなのではないかということを常々考えてきました。

そこで全日本Bチームという組織を作って、シニア(全日本)と同じ舞台で、競争させたらよいのではないかと考えたわけです。

優秀選手発掘委員会による選手集めを、各都道府県の協会に協力していただいています。

具体的に一昨年秋から、人選に入りました。中学生で身長が190cm以上という選手を全国の中体連の先生方に出してもらって、同じように、高等学校・大学からも、2mに近い選手で、最高到達点が3m40cm程度の選手を出してもらい、30名ほど集めて、一昨年の12月に合宿を行いました。

その席に指導者として、田中幹保氏に来てもらったわけです。さらに大学、高校、中学の指導者が一同に集まって、夜もバレーボールの話をしながら、とにかくこのシステムを続けていこうという話になりました。

その選手が、今、現段階の田中幹保率いるシニアチームに、8割くらいいます。荒削りではあるが、将来楽しみな選手たちが全日本で頑張ってくれています。

バレーボールの選手を養成していくのに、「選手・環境・指導者」のどれが欠けても強化はうまくいきません。

2年前、ユースで、特別枠で連れて行った松田という選手は身長2m1cm、指高が2m73cmあります。2年前に連れて行ったときには、ほとんど役に立ちませんでしたが、今回、この選手が活躍して、世界選手権の本番で韓国に勝つこととなります。その後イタリアに1-3で負け、ウクライナに勝って、2位で決勝トーナメントに進むのですが、その時点では、松田がブロック1位という状況でした。世

界の並み居る強豪国の選手も含めてのブロック第1位です。北島がスパイク部門の第2位でした。セッターの阿部は左利きの191cmで世界で第6位でした。世界で通用する選手はいます。

問題の一つは環境です。中国の選手は、ナショナルチームの選手になれば、生涯保障されます。韓国は高校が25チームしかありません。その中でベスト4になれば、無条件で大学に奨学金で進学できます。日本はメダルを取っても、その後の生活が保障されるわけではありません。環境によって、選手の取り組みが変わってきますので、考えていかなければいけません。

日本は8年ぶりに世界選手権に行くことができたわけですが、ジュニアのチームとして、世界に向けて練習する環境を作らなければなりませんでした。

監督を引き受けたときに、東京に各大学の監督に集まっていたいただき、いつだったら、選手を貸していただけるのかを確認して、東京でも何度も合宿を行いました。結果として、7ヶ月で75日合宿をさせてもらいました。練習ができれば、日本の選手は優秀です。世界で十分に通用します。

今年、ジュニアはアジア選手権では、韓国、サウジアラビアに、フルセット、ほんの少しの差で惜敗し、3位でしたが、世界選手権では、その韓国にストレートで勝ちました。ベスト8決めの試合で、セッター阿部が捻挫してしまい9位で終わりましたが、それ以上を狙えたチームだったと思います。

日本が、オリンピックや世界選手権でメダルを取るという可能性は、ジュニアで見る限りあると思います。強かった日本に復活できるのです。

そのためには、各世代の各レベルの指導者が、自分のチームのことだけを考えるのではなく、世界を見据えた指導をしていただきたいのです。

選手を出してくれる指導者の人が目を世界に向けてくれないと、システムとして通用しません。

強いチームの監督さんは、世界を考えてなくて、自分のチームが強くなることしか考えていないように感じます。

特に大学の選手を預かる指導者にお願いしたい。男子の場合、大学での選手生活がネックになっていると感じます。高校時代に「こいつは将来全日本を背負ってくれる」と考えていた選手が、大学の後半には普通の選手になってしまっています。

女子でも、世界よりもVリーグが大事だという監督さんが、たくさんおられます。そんなことを言っていたら、世界との差は広がるばかりです。

今回のジュニアの選手でも、世界選手権終了後に、3名をシニアに合流させ、使ってもらいました。3人とも、荒削りながらも十分に働いてくれました。まだまだ時間はかかると思いますが、将来、全日本の中心選手になってくれると思います。

前仲南町立仲南中学校教諭 亀山正昭氏

指導においては、生徒のいい面を出すということを考えていました。方針は、体力、精神的な面、そして指導者が一生懸命になること、その総和が力になります。

また、中学校の場合、保護者の協力が何より大切になります。「バレーボールをさせていて、大丈夫だろうか」「勉強が遅れるのではないか」、進学の心配もあります。私は社会科の教師でしたから、教室にいるときから、部員の学習態度とか、生活面にも配慮しました。バレーをしているときだけでは

なく、ふだんの生活面で頑張らせることで、保護者の信頼が得られると思います。

バレーボールをさせることがプラスになるんだということを、保護者にわかっていただくことが第一でした。

次に毎年のチームを大事にしていくことです。「今年の3年生は見込みがない。でも1年生はいい」ということで、2年生、3年生をおざなりにしてしまうようでは、保護者からも信頼感を得られません。

さらに、地域との関わりというのもあります。私がみていた中学校の地域ではバレーボールが盛んで、町民に理解がありました。町内に部活動後援会があって、後援会で集めた会費を部費として使わせてもらうことができました。

学校や他の先生も応援してくれました。バレーボールをしているときだけではなく、日常からいろいろと頑張っていることで、応援してもらえたのではないかと考えています。

「人間づくり」

「体と心を磨く、鍛える」ということを指導してきました。バレーをしているときには、全力でバレーに取り組む。授業の時は授業に集中する。そしてなによりもマナーです。マナーがよくないチームは勝てません。マナーを徹底することで、チームワーク、全員バレーにつながっていくと思います。

「基本練習の重視」

練習では基本練習を大切にします。基本がきちっとできていないと勝てません。特に中学校の場合、レシーブとサーブです。レシーブとサーブが悪かったら、指導者の責任だと思います。「合宿練習」

校内で合宿を年に2、3回行います。それにも保護者の方がご協力いただきます。また、県外の強いチームのところにも頻繁に合宿や練習試合に出かけました。選手にもいい刺激になると同時に、指導者の私にも、大変、勉強になりました。たくさんの指導者にお会いすることで、多くのことが学べます。

「生徒の長所を見つける」

自分が素人でスパイクを打ったりとかできませんでしたので、とにかく、いい部分を見つけて伸ばしてあげるということを考えていました。

チーム作りを行う上では、一番にセッターを決めます。どうしても、アタックを打てる子を、アタッカーにして、それ以外でセッターになれる子をとなりがちですが、最初にセッターを決めます。

「根気と粘り」

それから、根気と粘り。どんなに差があっても、あきらめないで頑張る。せっかちにならない。選手にたくさんのことを要求しないということが大切です。タイムでもそうですが、タイムを取って、たくさんのことを指示しても、ほとんど効果がありません。かえって、動揺を招くだけです。

また、ふだんの指導の中では、ほめることが大切です。しかってつぶすんじゃなくて、ほめて伸ばすことを考えなければなりません。

「日々の研究」

ただ勝てばいいというのではなく、勝った要因がなんだったのか、負けた要因はなんだったのかを

きちんと整理しておくことが大切です。

「バレーボールへの情熱」

指導者として一番大切なのは、バレーボールは好きであるということです。好きでなければつとまりません。

「家族の理解と協力」

今思えば、一番できなかったことですが、自分の家族の理解を得ることです。家族に支えてもらって、指導活動ができるわけですから、家族サービスというのも自分が頑張るために必要なことだと思います。

牟礼町立牟礼中学校教諭 長曾絹代

「勝てるための特效薬があるわけではない。毎日の積み重ねこそが大切だ。」

県で優勝するにしても、続けることが大切です。選手のいいときには誰でも勝てます。続けることが大事で、それが指導者の本当の力だと教わりました。

だから、どんな選手の時にも、辛抱してつきあってきています。今もその気持ちは変わりありません。

「中学校の部活動で目指していること-教育的運営」

私もバレーボールが大好きですから、その魅力だとか、楽しさだとか、バレーボールを教えるのはいいのですが、バレーボールで、何を教えるか、バレーボールで何を学ばせるのか、これを一番大事に思っています。

目的はなんだといわれれば、人間形成です。学校内、学級内、生徒会、近所、そういう中でも信頼される、まわりから感謝され、支援される、そういう子供達を育てていきたいと考えています。

そのためには、同好会的、遊び的なバレー部であってはいけない、部活動で学ぶことって、とても多くあります。

部活動は毎日あります。先輩、後輩がいます。同級生がいます。保護者がいます。そういう環境の中で学べることを学んで欲しいのです。

「意識を変える」

強くなるには、意識を変えることが大切ですが、ものすごくエネルギーが必要です。新しく赴任した学校のチームは、「全国大会などは夢の夢」という感じでした。それでも「勝ちたい」という気持ちはありますので、勝つためには、技術だとか、体力だとか、精神面とか、そういうことよりも、バレーに対する姿勢が大切で、それをわかってもらうために子供達と話し合いを繰り返しました。

その上で、「じゃあ、やろう。あなた達はきっと全国に行けるようになるよ」と言い続けて、やってきました。

「指導者として心がけていること」

選手は町内から入ってくる子供達だけですから、能力的には限られています。その限られたコマをどう使おうかと考えれば、個性とか能力をしっかりと把握することが必要で、個の持っているマイナス面をプラス面でカバーしていくような事を考えなければなりません。

「身体づくりと基礎基本の反復」

毎日、身体づくり、基礎基本の反復練習をすることが大切です。夏に目標の大会がありますので、その夏に戦える体力を身につけなければなりません。いくら気持ちがあっても、身体が動かなければ、試合には通用しません。

なんのためにトレーニングをしているのかを理解してもらって、目的意識を持って取り組んでもらえるようにしています。

基本の練習もそうです。基本練習は面白くないです。単純で、地味なプレーというのが、根本的なことを支えていて、それができないと、チームの組み立てとか、バレーの組み立て、攻撃の組み立てとかができないと考えています。

単純で地味なプレーというのは、頭でわかっているけど、毎日やらなければならないようになりますので、基本基礎は毎日、時間をかけ、じっくり行います。

そういう練習では、どうしても気が抜けますので、「私たちはレベルの高いところを狙っているので、最後のジュースになったときに、きちんとプレーできなければならない。一本一本を24点のプレーだと思って取り組む」ことを要求しています。

「スピーディでリズムのある練習」

女子では、スピーディで、リズムのある練習が必要です。練習のパターンが決まると、私はマシンのようにボールを出します。気迫とか、緊張感とかというムードはケガの防止につながります。ボールを渡すそのタイミングも大切で、ボール拾いが良くないと怒ることの方が多いくらいです。床拭きが、さっとやれない。ボールを追いかけていって、壁にあたりそうなときにかばうような動きができないなど、そこまで、気配り、配慮をして、スピーディに練習できるように、まわりの子も緊迫感を持って、練習できるように、そういう雰囲気作りを大切にしています。

「精神面の強化」

技術面ではどこのチームも変わらない。精神面の強化が必要だと感じています。女の子はずるがしこいです。故山田元全日本監督がいわれていたように、「妊娠の時の気張る力の持続」を引き出すことが、女子の指導で必要なことだと思います。

闘争心とか、高揚する気持ちとかを出させたい。そのためには、ライバルを見つけることです。あのチームには負けたくない。あのチームのこのポジションのやつには絶対負けたくない。また、もうひとつ、自分自身の弱いところに負けたくない。その3つのライバルを設定するようにしています。

それから、勝つための執着心、こだわりです。このボールを決めるんだ、このボールを拾うんだ。やるんだという気持ちです。それを生徒のほうに伝えていく。時には追い込むような練習も必要かと思っています。それが忍耐力をつけると思います。

「環境づくり」

一番、頭が痛いのは環境づくりです。保護者の理解とか、協力。最近は保護者の価値観も多様化してきていて、「バレーして何になるんや」と返されると、どうもこうもないのですが、保護者には、「私がバレーを通じて、何を教えたいのか」という部分をわかっていただくように努力します。

未熟な生徒を育てるには、とにかく時間が必要です。

5時半までは部活、それからは、社会体育のような形、育成会とありますが、保護者が責任を持って、送り迎えとか、援助をしてもらいながら、やっていました。練習時間とか、練習場所とか、県外との練習試合に必要な金銭面の問題等をご支援いただいていたいました。

今後の課題ですが、町内で生徒を集めて、やっているわけですが、少子化の問題とか、運動離れの問題などがあります。能力の高い子でも、なかなかやってくれません。極端に言えば、着替えるのも面倒くさいという例もあります。

私のところも部員が少なくなりましたし、他のチームでも同様です。そういうことを考えると、社会体育に移行して、同好会的に楽しくバレーを続けるというのも底辺を広げる意味では大事なことです。楽しいバレーをしている中から、もっと高いレベル、チャンピオンを目指したいという子も出てくるのではないかと。そういう環境作りをしてあげることが、必要になってくると思います。